

近世・近代の東總における相模大山信仰 参詣講の再編成をめぐる諸問題 菅根幸裕

The Sagami Oyama Faith in Toso during the Early Modern Period: Various Issues Surrounding the Re-organization of Parishioner Association

- ① 相模大山とは
- ② 問題の所在
- ③ 龍福寺奉納木太刀と溝原村石尊講
- ④ 御師増田家史料にみる東總地域の大山信仰
おわりに

【論文要旨】

神奈川県伊勢原市の相模大山は、古来関東を中心に多くの人々の信仰を集めてきた。現在まで、その信仰の流布に寄与した大山御師の活動については、田中宣一氏をはじめ多くの業績がある。すなわち、近世後期、大山不動を中心とした信仰が隆盛した過程について、旧御師に伝わる台帳から数的に論証しようとしたものである。

本稿は、こうした先行研究をふまえ、参詣者側の史料から、千葉県の東總地域をモデルに、近世・近代における相模大山信仰の形成と展開を分析する」とを目的とする。方法としては、まず海上町龍福寺に伝わる、宝曆十三年（一七六三）奉納の木太刀の銘文及び関連史料を分析して、この地域における大山信仰と大山講の構造を考察する。さらに、このデータを、参詣者を宿泊させた大山御師側の記録と照合する。このように、地域を限定し、信仰を付与した側と信仰を受容した側の両方の史料を比較検討することにより、宗教者側が信仰を獲得する方法と、参詣者が信仰を受容する基準

が明らかになると考えた。次に、神仏分離による信仰の主体の変化と、参詣者の対応を考察する。すなわち、木太刀を奉納する対象であった大山不動が排除され、阿夫利神社へと一方的に信仰の主体が移行したことに対する、東總地域の人々がいかに反応したかを、大山御師側の史料を中心に分析するものである。その結果、近世中期の段階で、東總地域の大山信仰は、龍福寺を中心とした小規模なものであったが、近世後期に、大山御師増田源之進家が熱心な檀那場開拓を東總地域で展開したために、いわゆる大山講が形成されていったことが明らかになった。しかし、近代以降、大山側が神仏分離を推進し、大山不動の講を神道に基づく「敬神講」に再編成しようとしたが、二割程度しか成功しなかった。また、大山信仰と大原幽学の性理学との関係は明確ではないが、近代以降、神道化した性理学と、この「敬神講」の教義が一致したのか、性理学地域には「敬神講」が形成されたことが判明した。